

2. 長崎・天草におけるキリシタン語彙の継承と変容

1. はじめに

(1) 本稿の目的と方法

我が国へのキリシタン伝来は、天文18 (1549) 年のザビエル来日を端緒とする。以後、多くのキリスト教用語が輸入されることになった。それらのうち、ポルトガル語やラテン語などを出自とする外来語のことをキリシタン語彙と呼ぶ。本稿の目的は、長崎・天草におけるキリシタン語彙の受容史を明らかにすることである。中世近世受容期の宣教師資料、「キリシタン版」と呼ばれる各種の教理書、近世禁教期における天草・浦上の「崩れ」文書、『天地始之事』、『こんちりさんのりやく』、『オラシヨ』などの諸テキスト、幕末維新復活期の宣教師資料、2000年以降におこなった聞き取り調査の結果などに基づき、各時期におけるキリシタン語彙の実態を明らかにする。

(2) 日本キリスト教史の時代区分

日本キリスト教史は、人々のキリスト教用語に対する評価、キリスト教用語をめぐる活動の変遷過程から、以下の全5期に区分することができる。中世近世受容期 [天文18 (1549) 年 (キリスト教の伝来) ~ 寛永21 (1644) 年 (最後の宣教師殉教)]、近世禁教期 [寛永21 (1644) 年 ~ 嘉永7 (1854) 年 (日米和親条約)]、幕末維新復活期 [嘉永7 (1854) 年 ~ 明治6 (1873) 年 (切支丹禁制の高札撤去)]、近代差別期 [明治6 (1873) 年 ~ 昭和20 (1945) 年 (太平洋戦争終結)]、戦後受容期 [昭和20 (1945) 年 ~ 現在]。

(3) 先行研究と本稿との関係

これまで筆者は、キリシタン語彙の受容史にかんする一連の論考を発表してきた。Ogawa (2006) と小川 (2006)、同 (2012b) ではパライズ *paraiso*、小川 (2007a) ではキリシタン *Christão*、同 (2007b) ではパーテル *pater* とパテレン *padre*、同 (2007c) ではサンタマリア *Santa Maria*、Ogawa (2010a) ではコンタス *contas* とロザリオ *rosario*、小川 (2012c) ではオラシヨ *oratio* について、それぞれ詳しく記述・考察した。クルス *cruz*、ゼンチヨ *gentio* については、Ogawa (2010b) で簡単に触れた。以上は、一つひとつの語についての論考である。他方、小川 (2011)、同 (2012a) は、キリシタン語彙全般の通史を描いたものである。

本稿のオリジナリティーは、「キリシタン版」にあらわれるキリシタン語彙を列挙した2. (3)、近世禁教期の天草・浦上の「崩れ」文書、『天地始之事』、『こんちりさんのりやく』などの諸テキストを対象とした分析と記述をおこなった3. (4) ~ (6) にある。一々断らないが、その他は、小川 (2011)、同 (2012a) からほぼそのまま引用・転載している。すなわち、本稿はオリジナルな学術論文ではなく報告書のための著述であることに留意されたい。

2. キリシタンの伝来とキリスト教用語

日本のキリスト教史は、天文18 (1549) 年のザビエル *Francisco de Xavier* らの鹿児島上陸に始ま

る。当時の日本には全国を統べる絶対的権力者がおらず、キリスト教の受容は各国領主の方針に従って進んだ。たとえば織田信長はキリスト教を保護し、九州では一部の大名がキリスト教に入信し、領民を集団改宗させた。彼らは、キリスト教を高く評価し、歓迎したのである。その後も教勢の拡大は続いた。しかし、天正15 (1587) 年の豊臣秀吉による「伴天連追放令」の発令により転機を迎え、やがてキリシタン禁制の世となる。しかし、近世初期は禁制下にあっても宣教師の来日が途絶えず、信者は増え続けていた。禁教令が出された慶長19 (1614) 年当時のキリシタン人口は37万人前後にのぼるといふ (五野井, 1990)。

(1) 仏教語による翻訳

中世近世受容期における布教用語の問題については既に多くの先行研究がある (土井, 1933: 岸野, 1986: 宮崎, 1998など)。布教最初期、宣教師は、キリスト教の教義や信仰に関わる概念を説明する際に仏教語を借用した。布教責任者であったザビエル *Xavier* らが、キリスト教の教義を日本人に理解させるためには、それらの概念を日本語に翻訳して伝えるべきだと考えたからである。たとえば「神」の概念を表す語として「大日」が用いられた。この方法は当時の民衆のキリスト教理解に役立ったが、キリスト教と仏教とを同一視させ、誤解させる危険性をはらんでいた。実際に彼らは「新しい仏教の一派を広めに来た仏僧」であると誤解されている (岸野, 1986: 宮崎, 1998)。

(2) 原語主義の徹底

その後、ザビエル *Xavier* らも真言宗における「大日」如来がキリスト教における「神」概念とは異なることに気付き、「大日」を廃してラテン語の *Deus* を用いるようになった。次に引用する宣教師ガージョ *Balthasar Gago* の書簡 (弘治元 (1555) 年9月8日付) には、その経緯が説明されている。引用は村上 (1968) による (pp. 101-102)。

我等は日本人がその宗旨において用ふる言葉をもって真理を説くこと長期間にわたりしが、虚偽の言葉をもって真理を説く時は誤解を生ずることに気づき、直に有害なりと認めらるる言葉に代へて我等の言葉を教ふることに変更したり。新なる事物は新なる言葉を必要とするのみならず、日本の言葉の真意は、我等が言はんと欲するものと甚だ相違せり。たとへば彼等にクルスの意味を説明するに当り、彼等の国語にて十文字 *Jumongi* と称するはクルスの形の文字にして十の意なるがゆえに、単純なる者はクルスと彼等の文字と同一なりと考ふべし。よって一步ごとに、また一語ごとに彼等に説明をなすか、或はその語を変更する必要あり。かくのごとく五十以上の有害なる語ありしが、今彼等の語の意味とその害ある点、ならびに我等の語の意味を説けば、彼等もその相違を認め、彼等の言葉をもってデウスのことを説く時は誤解を生ずることを覚り、右のごとくして明に了

¹ このことについて海老澤 (1970) は「キリスト教と仏教という対蹠的哲学をもつ二大宗教の直接交渉は、日本においてのみ見られるところである。かつ精神的には日本浄土教の阿弥陀信仰と、その前における人間認識、衆生の悉皆成仏という救済信仰の上に、キリシタンが伝えられ、仏教語を媒介として教理・信仰の伝達を図ったということは、贖罪信仰への昇華を導く契機ともなったことにおいて注意するべきである。それはわざと仏教の真似をしてごまかそうとしたものではなく、伝える者も伝えられる側においても自然の成り行きであったと言ってよい。宗教・哲学的概念の媒介には仏教語しかなかったからである」(p. 600) と述べている。

解するにいたれり。予がこのことを述ぶるは、異教徒の間にありてデウスのことを説くに当り、説明に注意し、その用語を考慮せんがためなり。

1590 (天正18) 年には、宣教師の手によって西欧から活版印刷機が持ち込まれ、多数の文献が出版された。これらは一般に「キリシタン版」と呼ばれる。次に引用するのは、天正20 (1592) 年に出版された『Doctrina Christan』の一部である。引用は橋本 (1961) による (pp. 193-194)。

クルスの道を以て一切人間の御助け手となり給ふが故に、此の御恩を取分き信じ、其に憑を懸け奉り、アニマ、色身の用ある時は、此の御主よりと、サンタエケレジャより教へ給ふオラシヨを以て頼み奉りて、十のマンダメントを守り、定め給ふサカラメントを授かり奉る事肝要なり。斯の如く勤め終るに於ては、遂にパライズの楽を蒙り、インヘルノの苦を遁るべき事疑無し。

以下は慶長5 (1600) 年に出版されたローマ字本の『ドチリナ・キリシタン』の一部である。引用は海老澤ほか (1993) による (pp. 31-32)。□は破損・虫害などによる欠字。ルビは省略した。

貴きビルゼンマリヤのロザイロとて百五十遍のオラシヨの事。

師 御母サンタマリヤのロザイロと申すは、バアテルノステル十五巻アベマリヤ五十巻なり。これを御主ゼズキリシトのご作業に宛がひ奉り、十五の観念に分くるなり。初めの五か条は御母サンタマリヤ御悦びの題目なるによって、即ち悦びの観念と号するなり。中の五か条は御主のごパシヨンをサンタマリヤ深くご愁歎なし給ふによって、御悲しみの観念と申すなり。後の五か条は御主ゼズキリシト蘇り給ひてより、サンタマリ□ご歡喜深きが故に、ゴラウリヤの観念と名付るなり (中略) もしこの百五十遍のオラシヨを毎日勤め奉る事叶はぬにおいては、せめてその三分一なる何れの五か条なりとも、望みに従って観念し□、バアテルノステル五巻、アベマリヤ五十べ□申すべし。

これとはほぼ同内容の文言が、慶長5 (1600) 年に長崎で編纂・出版された『おらしよの翻譯』にも記されている。また、『おらしよの翻譯』には、かな表記されたラテン語の祈りも収められており、今日でもよく耳にする Ave Maria の祈りについては次のように記されている。引用文上段は林 (1981) による (p. 124)。□は破損・虫害などによる欠字。下段は現行通用のラテン語文である。

あべまりやがらしやべれな。だうみぬすてゑくんべ□ぢたつういんむりふす。ゑつ

Ave Maria, gratia plena, Dominus tecum, benedicta tu in mulieribus, et

べねぢつすふるつすべんちりすつうい。ぜずゝさんたまりやまあてるでい。おらぼろなうびす

benedictus fructus ventris tui Jesus. Sancta Maria mater Dei, ora pro nobis

べかたうりぶす。ぬんくゑつういんおらもるちすなうすてれ。あめん

peccatoribus, nunc, et in hora mortis nostrae. Amen

このように、宣教師が伝えた新しい概念は、布教当初は仏教語による翻訳をとおして、その後、原語をそのまま音訳するかたちで人々に受容されていった²。

(3) 「キリシタン版」にあらわれるキリシタン語彙

本節では、数多く出版された「キリシタン版」のうち、『Doctrina Christan』、『ばうちずもの授けやう』『ぎや・ど・ぺかどる』、『おらしよの翻譯』、『日本大文典』、『こんてむつすむん地』にあらわれるキリシタン語彙を掲げる。語は50音順に並べ、各語について、語形 (意味) 所載文献の順に記す。なお、文献名は以下のとおり略記する。①『Doctrina Christan』は「ド」、②『ばうちずもの授けやう』は「ば」、③『ぎや・ど・ぺかどる』は「キ」、④『おらしよの翻譯』は「お」、⑤『日本大文典』は「日」、⑥『こんてむつすむん地』は「こ」。①は、橋本 (1961) および小島 (1966) を、②は林 (1981) を、③は天理図書館善本叢書と書之部編集委員会 (1976~1978) および豊島 (1987) を、④は林 (1981) を、⑤は土井 (1955) を、⑥は近藤 (1977) を参照した。

○アグワベンタ/アグハベンタ (聖水) ド・キ

○イマアゼン (画像) 日

○アダン (アダム) 乙

○イマジナサン (想像) 日

○アニマ (靈魂) ド・ば・お・日・乙

○イルマン (修道士) 日

○アニユス・デイ (神の子羊) 日

○インオウト (望みにおいて) ば

○アブラン (アブラハム) ド

○インスピラサン (靈感) 日

○アベマリヤ/アベマリア (天使祝詞・祈祷文) ド・ば・キ・お

○インツルゼンシャ (赦罪) 日

○アポウストロ/アポストロ/アホストロ (宗徒・使徒) ド・ば・乙・お・キ

○インヘルノ/エンヘルノ (地獄・永獄) ド・ば・キ・お・日・乙

○アメン (祈りの言葉) ド・ば・お

○インヒニト (無限・無辺) ド

○アルカ (方舟) 乙

○インモルタル (不死の・不滅なる) ド・ば・お

○アルカンジヨ (総領天神・大天神・大天使) ド・お・日

○ウマナ (人の) ド

○アルタル (聖壇・祭壇) ド

○ウマニダアデ/ウマニダアテ (人性・人間の性) ド・お・日

○アルチイゴ (個條・條目) ド

○ウミルダアデ (謙遜) ド・お・日

○アルパ (豎琴) 乙

○エンピリヨ (最高天) 日

○アンジヨ (天神・天使) ド・ば・お・日・乙

○オオレヨ/オレヨ/ヲレヨ (油) ド

○イザベル (人名) お

○オスチャ/ラスチャ (パン・聖餐) ド・お

○イスラエル (イスラエル) 乙

○オビリガサン (義務) ド・日

○イデア (観念) キ

○オムニポテンチシモ (量りなき御自由自在の御所) 日

○イノセンシャ (無垢・科なし) 乙

○オラサン (祈祷文) 日

² 翻訳語を用いるのか、それとも原語を用いるのかという問題については、同時期にキリシタンの布教活動が行われた中国でも議論されていた。たとえば Deus については、造語の「天主」、YHWH の音訳語「爺火華 (イエフォホワ)」、翻訳語の「神主」「神天上帝」「上帝」「皇上帝」などが用いられた (菊地, 2003)。なお、日本における全体的な傾向として「訳語主義から原語主義への変遷」を指摘できるが、布教当初は翻訳され、後に原語が用いられるようになった概念の中に、再び翻訳語が用いられるようになったものがある (たとえば「果報 ⇄ beatus ベアト」(米井, 1998))。その意図や目的、結果については、米井 (2009) や小島 (2009) など取り扱ったが、未解明の部分も多い。

- オラシヨ (祈り・経・祈祷文) ド・ば・お・日
- オリジナル (根源の) ド・ば・日
- オリベテ (山名) お
- オルデン (品級・叙階) ド・お・日
- オンタアデ (神の意志) ド・日・乙
- カスチダアデ/ガスチダアデ (貞潔・貞潔・純潔) ド・お・日
- カタウリカ (公・普通) お
- カテキズモ (公教要理・教義問答書・説法) ド・ば
- カトウリカ/カタウリカ (公) ド・キ
- ガラサ (恩寵・聖寵) ド・お・日・乙
- カリス (聖杯) ド・お
- カリダアデ (愛・慈愛・愛徳・仁・仁愛) ド・お・日・乙
- カルデアレス (基本の [複数]) ド
- カルテナアレ (樞要な・根本の・基本の [複数]) ド・お
- カルハリヨ (山名) お
- キリシタン/キリシタム (キリスト教の・キリスト教徒) ド・ば・キ・お・日・乙
- キリシト (キリスト) ド・お・乙
- キリズマ (堅振・堅信礼) ド
- クハレズマ/クワレイズマ/クハレイスマ (四旬齋) 日・ド・キ
- グラウリヤ/ゴラウリヤ/グロウリヤ/グラフリヤ/グラウリア (栄光) ば・乙・お・ド・キ
- クルス (十字架) ド・ば・お・日・乙
- ケレト (信徒信経) お
- ケレド (信・信道) ド
- コムニアン (通功・聖餐拝受) ド
- コルポラル (身体) の) ド・日
- コレイチヨ (学林) ド
- コロハ (冠=祈りの名に用いる) お
- コンシリヨ/コンセリヨ (賢慮・考量) キ・お・ド
- コンシリヨ/コムシリヨ (宗教会議) ド・キ
- コンシエンシヤ/コンシエンシヤ (良心) ド・ば・キ・日・乙
- コンタス (念珠) 日
- コンタベンタ (聖なる数珠) 日
- コンチリサン (完全な痛悔・悔心) ド・ば・日・乙
- コンテンブラサン (深きことの観念・工夫) 乙
- コンパニヤ/コンパニア/コンパニア (会・修道会) 日・ド・キ
- コンヒサン/コムヒサン (罪の告白・告解・懺悔・白状) ド・ば・キ・お・日・乙
- コンヒルマサン (秘蹟・堅信) お・ド
- コンヘサウレス (証聖者) 乙
- コンヘソウル/コンヘサウル (懺悔僧) ド・キ
- サカラメント/サカラメムト (秘蹟) ド・ば・キ・お・日・乙
- サカラメントス (秘蹟 [複数]) ド・ば
- サキリヒイシヨ (犠牲) ド
- サセルダウテ/サセルドウテ (司祭・神父) ド・ば・キ・お
- サチシハサン/サシチハサン (償贖) ド・日・キ
- サハト/サバド (土曜日・安息日) お・ド
- サビエンシヤ/サビエンシヤ/サヒエンシヤ (上智・智慧) ド・お・日・キ
- サビエンチシモ (量りなき御智慧の所) 日
- サラモン (ソロモン王) 乙
- サレベレジイナ (祈りの名) ド・お
- サン (聖なる) ド
- サンタ (聖なる [女性]) ド・お
- サンチ (聖なる [男性]) ド
- サンタマリア/サンタマリヤ (聖母マリヤ) ば・日
- サンジヨアンパウチスタ (人名。洗者ヨハネ) お・乙
- サンタエケレジア (聖なる教会) ば
- サンチシモ/サンチイシモ (至聖なる) ド・キ
- サント (聖人) 乙・日
- サントス (聖人達 [複数]) ド・お・乙
- サンパウロ (聖パウロ) お・乙
- サンペイトロ (聖ペテロ) お・乙
- サンミゲル (聖ミカエル) お
- サンルウカス (聖ルカ) 乙
- シエンシヤ/シエンシヤ (知識・学問) ド・キ
- ジュイゾ (審判) ド・日・乙
- ジュスチイサ/ジュスチサ/ジュスチイシヤ/ジュスチシア (公正・正義) ば・お・日・ド・キ
- ジュスチシモ (量りなき御憲法の御廉直の御所) 日

- デウス (神・天主) ド・ば・お・日・乙
- デウスバアテレ (御父なる神) ば
- デウスヒイリヨ (神の御子) ば
- テストメント (意志) 日
- デバサン (敬虔) 日
- テモル (畏敬) ド
- テヨロガレス/テヨロガアレス (神を目的におく・神学上の) ド・お
- テンタサン/テムタサン (誘惑) ド・ば・お・日・乙
- テンペランサ (節制) ド・お・日
- ドウネス/ダウネス/ドンエス (賜り物 [複数]) ド
- ドウミナ/ダウミナ (貴女の尊称) ド・キ
- ドチリイナ (教義・教理) ド
- ドミンゴ (主の日・日曜日) ド・お
- ナシメント (誕生) 日
- ナタル (キリスト降誕祭) 日
- ナツラ/ナツウラ (ものの性・生得の性・力) ド・キ・日・乙
- ナツラル (自然) ド・キ
- ナツレザ (本性・本質) ド・日
- ノエ (ノア) 乙
- パアテルナウステル/パアテルノウステル/ハアテルナウステル/ハテルナウステル (主の祈り) ド・ば・お
- パアテレ/パアデレ/ハテレ (神父) ド・ば・お・日
- パアパ/パツパ (教皇・法王) ド・乙
- パウチシタ (洗礼施工者・施洗) ド
- パウチズモ/パウチイスモ (洗礼) ド・ば・お・日・キ
- パシオン/ハシオン (受難・キリストの御苦難) ド・ば・キ・お・日・乙
- パシエンシヤ・パシエンシヤ (忍耐) ド・キ・お
- バスクハ/ハスクハ (過越祭・復活主日) ド・キ・お・日
- パチリアルカ (太祖) 乙
- パテル (父) 日
- パライズ/パラヒゾ (天国・天堂) ば・お・日
- パライズテレアル (地上の楽園) 日
- パン (パン) ド・お
- ヒイデス (信仰・信徳) ド・ば・お・日・乙
- ジュスチヒカサン (弁護) 日
- ジュスト (公平) 日
- ジュデウ/ジュデヨ (ユダヤ人) ド・お・日
- ジョブ (ヨブ、ヨブ記)
- シエンシヤ (知識) お
- ス>タンシヤ (実体・本体) ド・ば・お
- ス>タンシアル (実体の) ド
- スピリツ・エスピリツ (霊・息・かぜ・靈魂) ド・お・日・乙
- スピリツアル・エスピリツアル (霊の・精神上の) ド・日
- スピリツサント/スピリツサンチ (精霊) ド・ば・お・日・乙
- スベランサ (望み・希望) ド
- スベリヨル (長老) ド
- スベリヨウレス (上長達 [複数]) ド・ば
- ゼジュン (大齋・断食) ド・お・日・乙
- ゼズキリシト (イエズス・キリスト) ば・お・日・乙
- ゼズ> (イエズス) ば・お・日
- セスタ (第六の・金曜日) お
- セスタヘリヤ (金曜日) ド
- ゼツセマニ (ゲツセマニの園=地名) お
- セヨ (地獄) ド
- ゼラル (一般の・普さ) ド
- センシチバ (知覚ある) 日
- センチイド (感性・感覚) ド
- センチイドス (々 [複数]) ド
- ゼンチヨ (外教・異教徒) ド・ば
- ソウベレナツラル/サウベレナツラル (自然を超越した・常理を超えた) ド
- ソマナサンタ (聖週) 日
- ダウネス (賜物) お
- ダビツ (ダビデ王) 乙
- チモルデイ (敬畏・敬神) お
- チリゼンサ/チリゼンシヤ (精進・勤勉) ド・お
- チシビリイナ (苦行用の鞭) 日
- チピンダアデ/チピニダアデ (神・神たること) ド・日
- チリンダアデ (三位一体) ド・日・乙
- チルピヨ (大洪水) 日

- ビイビリア (聖書) 乙
 ○ヒイリヨ (聖子・子) ド・ば・お・日
 ○ビエダアデ/ヒアダアデ (信心) ド
 ○ビスバアド (僧正管区・司教の管轄地) ド
 ○ビスポ (僧正・司教) ド・日
 ○ヒニス (終わり) ド
 ○ピリミザス/ヒリミシアス (初穂) ド
 ○ビルジネス (処女・乙女) 乙
 ○ビルジンダアデ (処女性) 日
 ○ビルゼン (処女・童貞女) ド・お・日・乙
 ○ビルゼンマリヤ (童貞女マリヤ) ば
 ○ビルツウデ/ビルツウデス (善徳) ド・お・日
 ○ビルツス(?)日
 ○ヒロゾホ (哲学者) 乙
 ○ビエタデ (敬虔・孝愛) お
 ○プリヒカサン (清浄にすること) 日
 ○ブルガトウリヨ/ブルガタウリヨ (煉獄) ド・キ・日・乙
 ○ブルデンシヤ (賢慮・謹慎・細心) ド・お・日
 ○ベジタチバ (生氣ある) 日
 ○ベソア (身位) 日
 ○ベナベンツランサ (至福) ド・お・日
 ○ベニアル (赦さるべき) ド・ば・日
 ○ヘニテンシヤ/ベニテンシヤ (悔悛・後悔・告解) ド・ば・お・日・乙
 ○ベネヂイタ (福を受けたる (女性)) ド
 ○ベネヂイト (福を受けたる (男性)) ド
 ○ベアト/ベヤト/ヘヤト (聖人) ド・お・日・乙・ば
 ○ヘリヤ (週日・祭日) ド
 ○ベルセベランサ (忍耐) 日
 ○ベルサウナ/ベルソウナ (位格) ド・ば・キ・お・日
 ○ベルシナル/ヘルシナル (十字架をきること) ド・キ
 ○ベルヘイサン (完全) 日
 ○ベンサン (祝福) ド・お
 ○ベンゼル (浄める・聖別する) ド
 ○ポテンシヤ (力) ド・日
 ○ホルタレイザ (堅固・剛毅) ド・お
 ○ホルマ (形・形態) ド
 ○ポロシモ/ポロシモ (隣人・他人) ド・キ・お・乙
- ポロピンシャル (管区長・尊老・様) 日
 ○ポロヘイタ/ホロヘエタ (預言者) ド・キ
 ○ポロヘイタス (預言者 (複数形)) ば
 ○ポロヘシヤ (予言) 日
 ○ポロヘタ (予言者) 乙
 ○ボンシヨピラト (人名。ローマのユデア総督) お
 ○ボンダアデ (慈悲・親切) ド
 ○マダメント/マンダメント (戒律・掟) ド・お・日
 ○マチリモウニヨ/マチリマウニヨ (婚姻) ド・お・日
 ○マテリア/マテリア (実質) ド
 ○マリヤ/マリア (聖母マリヤ) ド・ば・キ・お
 ○マルチル (殉教者) 日
 ○マルチレス (殉教者達) ば・乙
 ○マルテ (ローマ神話で Jupiter と Juno との間に生まれた軍神) 日
 ○ミイサ (ミサ聖祭) ド・お・日・乙
 ○ミステリヨ (不可思議・玄義・秘義) ド
 ○ミゼリコルチヤ (慈悲・哀憐) ド・日
 ○ミゼリコルチシモ (量りなき御慈悲の所) 日
 ○メモリヤ/メモウリヤ/メマウリア (記憶) 日・ド・キ
 ○メンボロス (部員・会員 [複数]) ド
 ○モイゼス (モーセ) 乙
 ○モルタル (死に当たる・救われぬ) ド・ば・日
 ○ラシヨナル (理性ある) 日
 ○ラダイニヤス (連禱) お
 ○ラチン (ラテン) お
 ○ラハエル (天使名) お
 ○リベラリダアデ (寛大さ・大度・好施) ド・お
 ○リンボ (孩所・古聖所) ば・日・ド
 ○ルシヘル (悪魔) 日
 ○レイトル (学林長) 日
 ○ロウマ/ラウマ (ローマ) ド・キ
 ○ロザイロ (ロザリオ) お
 ○エウカリスチャ/エウカリスチャ/エウカリスチャア/エウカリスチャ (聖体の秘蹟・聖体拝礼・聖体・聖餐) ド・キ・お・日・乙
 ○エケレジャ/エケレジャ/エケレンジャ (教会) ド・ば・キ・お・日・乙
 ○エスキリツウラ (聖書) ば・日

- エステレマウンサン/エステレマウンサン (最終の・終油の秘蹟・臨終) ド・キ・お
 ○エハンゼリヨ (聖福音書) 乙
 ○エンテンヂメント/エンテンジメント/エンテンヂメント/エンテンジメント (悟性・分別) ド・キ・日
 ○エスペランサ (望徳) 日

以上のとおり、「キリシタン版」には多くのキリシタン語彙が使用されている。当時、多くの人々がキリシタンに入信したわけであるが、それは多くのキリシタン語彙が日本語の語彙体系の中に取り入れられていったことを意味する。しかし、時の政権の禁教政策により、キリシタン語彙の多くは、語音、意味ともに変容していくことになる。

3. キリシタン語彙の継承と変容

最後の宣教師小西マンシヨが殉教したとされる寛永21 (1644) 年以降、日本には一人の宣教師もおらず、一つの教会も存在しない状態が200年以上続いた (宮崎, 1996)。江戸幕府によるキリシタン禁教政策は、九州に潜伏キリシタン・カクレキリシタン³を生み、民衆の間にキリスト教邪教観を醸成していった。

(1) バテレン padre の変容

長期間にわたる禁教政策の結果、キリシタン語彙の意味と語形 (語音) は変化していった。「バテレン」は、ポルトガル語 padre (神父) に「伴天連」などの漢字があてられ、その字音によって生じた語である。この語は、江戸中期から明治にかけてキリスト教とその宗徒に対する偏見を含んだ俗称として用いられた。江戸時代中期以降は「荒々しい芸風」を意味したり、俠者の一派を「ばてれん組」と称したりすることもあった (日本国語大辞典第2版編集委員会, 2000~2002)。これは、キリシタン禁教政策により醸成された民衆のキリシタン邪教観を背景に、キリシタン語彙が差別的な意味を持ち、あるいはマイナス評価を表す語として使用されるようになった事例である。

(2) キリスト教用語に対する仏教の影響—『天地始之事』を例に—

長崎県の黒崎地方と五島地方における潜伏キリシタンの口頭伝承『天地始之事』は、日本におけるキリスト教の土着化と多宗教の混交状態を示す史料である。片岡 (1972) は、この書の内容を「天地創造、天使と人間の墮落と救世主キリストの生涯、聖マリアの事跡、世界の終末と公審判までの聖書物語が、多くの訛伝と仮託を加えて口伝されたもので、キリスト教的民話ともいうべき内容になっている」(p. 1002) と説明している。この史料にあらわれるキリシタン語彙には、仏教の影響が明らかである。以下の引用は海老澤ほか (1970) による (p. 397)。底本は文政年間 (1818~1830) の書写と推定されている⁴。

³ 本稿では「カクレキリシタン」を「キリシタン時代にキリスト教に改宗した者の子孫で、明治6 (1873) 年に禁教令が解かれた後もカトリックとは一線を画し、潜伏時代より伝承されてきた信仰形態を組織下において維持し続けている人びと及びその宗教」と定義する。寛永21 (1644) 年~明治6 (1873) 年における同種の信仰者及びその宗教を「潜伏キリシタン」と呼び、これを「カクレキリシタン」と区別する。この区別は、姉崎 (1925)、片岡 (1967)、宮崎 (1996, 2002) に従うものである。

御身のたまいけるは、天の高さ地のふかさ、八万余ちよう、^{ほとけ}仏とおがむは、天の御主^{あるじでうす}天帝、人間の^ご後世のたすかりを、なさしめたも^{ほとけ}ふ仏これ也。此ほとけ天地日月御つくり、はらいぞといふ^{らく}極楽御つくり、人間万物、みな、ありとあらゆるもの、此ほとけ思召^{めし}まゝに、つくらせたもふ也。

天帝^{でうす} Deus が「仏」、はらいぞ paraiso が「極楽」となっている。キリスト教用語に対する仏教（仏教語）の影響は中世近世受容期からみられ、宣教師が去った近世禁教期にはいっそうその傾向が強くなったものと考えられる。

(3) 潜伏キリシタンの伝えたキリシタン語彙に対する評価

上でみたとおり、禁教期において、キリシタン語彙は宣教師が伝えた原語の語音・意味から変容していった。それをどのように評価するかは、「変容」をどう捉え、解釈するかによって異なってくる。そもそも言語は、変化することを本質的な性質として持っている。宣教師が伝えたものを「正統」と見なせば、近世禁教期における変容は、異端化、異質化として評価・解釈される。他方、土着化、風土化したものとみて評価することもできるわけである。以下は、『天地始之事』に対する片岡(1972)の評言である(p. 1002)。

「天地始之事」は、このような外的、内的条件の異常さ（迫害と禁教—引用者注）の中で、聖書物語の原形に、多くの異質的要素が混成され、土俗信仰的変容を来したものである。しかし、それをよい意味の風土化と見るのは妥当でなく、(中略)政治、社会、宗教などの異常な環境条件が、いかに人間の思想や信仰まで異常化させるかということの事例として大切な意味を持つのではあるまいか。

片岡は『天地始之事』を「人間の思想や信仰まで異常化させ」た事例と捉え、潜伏キリシタン・カクレキリシタン信仰そのものに対して「カトリックからの離脱」とみて評価しない(片岡, 1967)。

他方、以下に引用する田北(1970)は『天地始之事』を民俗学的資料として、キリスト教信仰の土着化、風土化の結果として高く評価する(p. 631)。谷川(1982)や紙谷(1986)も同様の立場をとっている。

潜伏(かくれ)キリシタンの現存については、評価はまちまちであるが、私はここに日本人の宗教的特性の一つのあらわれとして、軽視できないものを見ている。潜伏キリシタンの半数強は百年前に教会に帰ったが、残りの半数弱は潜伏状態をつづけた。そこには布教上の不手際もあるが、それを責めるよりは、むしろ貴重な宗教民俗学の資料を保存することとなった結果の方を重視すべきである。史的キリシタンの不完全な残存として軽視せず、日本の土壌にしみこんで根付いたキリスト教の民間下層を重視すべきである。『天地始之事』はこの資料価値を代表している。

4 引用文の振仮名には、①底本の平仮名に適宜漢字を宛て、もとの平仮名を振仮名にしたもの、②底本にある振仮名、③校注者が付した振仮名の3種があり、3種を書き分けている。しかし本稿の論旨とは関わないため3種の表記を統一した。

(4) 潜伏キリシタンが伝えた近世禁教期の諸テキストにみられるキリシタン語彙

本節では、潜伏キリシタンが伝えた近世禁教期の史料『こんちりさんのりやく』と『天地始之事』にあらわれるキリシタン語彙を掲げる。『こんちりさんのりやく』は、慶長8(1603)年に出版されたとみられる「キリシタン版」だが、刊本は現存しない。しかし、明治時代まで、かなり正確な写本が、外海、五島、長崎地方の潜伏キリシタンの間に流布していた(チースリク, 1970; 片岡, 1970)。慶応元(1865)年5月に書かれた長崎大浦天主堂のプチジャン Bernard Thadée Petitjean 司教の書簡には、潜伏キリシタンたちが伝えてきた『天地始之事』と『こんちりさんのりやく』の写本を彼らから受け取ったことが記されている(純心女子短期大学長崎地方文化史研究所, 1986, pp. 80-81, 104-108)。

本節では、両書にあらわれるキリシタン語彙を2.(3)節にならって掲げる。ともに、海老澤ほか(1970)を参照した。

①『こんちりさんのりやく』におけるキリシタン語彙

- | | |
|--------------------------|----------------------------|
| ○アニマ(靈魂) | ○ゼンチヨ(外教・異教徒) |
| ○アンジヨ(天神・天使) | ○デウス(神・天主) |
| ○アンメン(祈りの言葉) | ○バアテレ(神父) |
| ○イヌヘルノ/イヌヘル(地獄・永獄) | ○パウチイズモ/パウチイズモ(洗礼) |
| ○オラツシヨ/オラツ所(祈り・経・祈祷文) | ○バツ所(受難・キリストの御苦難) |
| ○ガラサ(恩寵・聖寵) | ○バライソ/バライソ(天国) |
| ○キリシタン(キリスト教の・キリスト教徒) | ○ホロエタ(予言者) |
| ○クルス(十字架) | ○ヒイデス(信仰・信徳) |
| ○コンチリサン/コンチリサン(完全な痛悔・悔心) | ○ヒイリヨ(聖子・子) |
| ○コンピサン(罪の告白・告解・懺悔・白状) | ○ビルゼン(処女・童貞女) |
| ○コンエソウル(懺悔僧) | ○サンタ丸ヤ(聖マリア) |
| ○サガラメント(秘蹟) | ○ヘルソウナ/ベルソウナ(位格) |
| ○スヘリツサント/スヒリツサント(精霊) | ○モルタル(死に当たる・救われぬ) |
| ○ゼス>(イエズス) | ○ヨウガレシツヤ(聖体の秘蹟・聖体拝礼・聖体・聖餐) |
| ○ゼス>キリシト(イエズス・キリスト) | ○エキレンジャ(教会) |

②『天地始之事』におけるキリシタン語彙

- | | |
|-----------------------|-------------------------------------|
| ○アダン(アダム) | ○イヌヘルノ/イヌベルノ/インヘルノ/イヌヘリノ
(地獄・永獄) |
| ○アニマ(靈魂) | ○オラツ所/御ラツ所(祈り・経・祈祷文) |
| ○アベ丸ヤ(天使祝詞・祈祷文) | ○オリベテ(オリベテ山) |
| ○アボウストロ(使徒) | ○ガラサ/ガラツサ(恩寵・聖寵) |
| ○アリカンジヨ(総領天神・大天神・大天使) | ○カルワリヤウ/カルワ竜(ゴルゴダ) |
| ○アンジヨ(天神・天使) | ○キリント(信徒信経) |
| ○アンメイゼス>(祈りの言葉) | ○キンタ(木曜) |
| ○イザベルナ/イザヒルナ(エリザベト) | |

- クロウス/クルウス (十字架)
- クワルタ (水曜)
- コンチリサン (完全な痛悔・悔心)
- コンエソウル (懺悔僧)
- サバタ/サバト (土曜)
- サルベシナ (祈祷文の名 Salve Regina)
- サンガムリヤ (大天使ガブリエル)
- 三ジユワン/サンジワン (洗礼者聖ヨハネ)
- サントイザベルナ (聖エリザベト)
- サント丸ヤ (聖マリア)
- サントアキレンジャ/三タエキレンジャ/サントアキレンジャ (教会)
- 三パウロ (聖パウロ)
- 三ペイトロ (聖ペテロ)
- 三みぎり (大聖天使ミカエル)
- シクダ (月曜)
- ジスウス/ゼジウス (イエズス)
- ジユスキリ人 (イエズスキリスト)
- ジユヘル (天使の名)
- 十ダツ (ユダ)
- シロクシサン (割礼)
- ゼシン (齋戒・断食)
- セスタ (金曜)
- ゼ>丸ヤ (ゲッセマニア)
- タボロ (タボロ山)
- デウス (神・天主)
- テルシヤ (火曜)
- ドメイゴス (主の日、日曜日)
- バアテル (父なる神)
- パウチスモフ/パウチスマウ (洗礼)
- バツシヨ (受難)
- バツバ (教皇)
- バツバ丸じ (殉教して聖人の位にあげられた教皇)
- バライソ/バライソ/ハライソ/バライソ/ハライソ (天国)
- ヒイリヨ (聖子・子)
- ビルジンサント丸ヤ (童貞女聖マリア)
- ビルゼン丸ヤ (童貞女マリア)
- フルカトフリヤ/フルカトウリヤ (煉獄)
- ベレン (ベツレヘム)
- ペロウニカ (女性の名)
- マサン (りんご)
- 丸ヤ (聖母マリア)
- ヨロウテツ/ヨロウデツ/ヨロウ鉄 (ヘロデ王)
- ロウマ (ローマ)
- ロソン (ルソン島)
- エキレンジャ (教会)
- エワ (イブ)

③『天地始之事』におけるキリシタン語彙の変容語

- アネイステウ (水汲みの女ペロウニカに与えられた称号) ← 羅語 Agnus dei (神の子羊) の転訛
- オリベテン (12天のうちの1つ) ← 羅語 Oliveti (オリベト山=キリストが昇天した場所とされる) の転訛
- オロハ (12天のうちの1つ) ← 羅・西語 corona (冠=祈りの名に用いる) の転訛
- コロウドノサント丸ヤ (花冠の聖マリア) ← 羅・西語 corona を聖母マリアの名に冠したもの
- コンスタンチ (12天のうちの1つ) ← 葡語 Constantinopla (コンスタンチノーブル) の前部の転訛
- サガラメントフ (天使の名) ← 葡語 Sacramento (秘蹟) を天使の名に転用したもの
- サンゼンゼ十 (王の名) ← Amen Jesus (アーメンイエズス) を王の名としたもの
- 三チイ島/三チ島 (島の名) ← 羅語 sanctissima (sanctus(聖なる)の最上級。至福なる三位一体の神) の転訛
- サントウス/三トウス (聖人の名) ← 羅語 santos (聖人の複数形) が固有名詞に転訛したもの
- ジユリシヤレン堂 (死者の善悪をはかる場所) ← 羅語 Jerusalem (エルサレム) の転訛
- スヘルトサント (聖母) ← 葡語 spirito santo (聖霊) を聖母マリアとした転訛
- トロンノ貝 (ホラ貝?) ← 葡語 trombeta (トランベツト) の転訛

- バツバ (12天のうちの1つ) ← 葡語 papa (教皇) の転訛
- ビルゼンの行/ビルジンの行 (性の交わりを持たない修行) ← 葡語 virgen (処女) を、仏教的な行として捉えたもの
- ベンボウ (地獄) ← 葡語 linbo (古聖所) の転訛
- ホラ (12天のうちの1つ) ← 葡語 Constantinopla (コンスタンチノーブル) の後部の転訛
- ボンシヤ・ピロウト/ボンシヤ・ピラウト (ヨロウテツ王の2人の家来) ← 羅語 Pontius Pilatus (ピラト提督) を2人の名としたもの

『こんちりさんのりやく』と『天地始之事』には、一見とおり、数多くのキリシタン語彙がみられる。『こんちりさんのりやく』のキリシタン語彙は、原語の語音と意味をほぼ正確に継承している。『天地始之事』の方は、原語の語音・意味を保った②に掲げた語彙と、原語の語音・意味から変容した③に掲げた語彙とがあり、『こんちりさんのりやく』とは異なっている。

(5) 文化2 (1805) 年の「天草崩れ」文書にみられるオラシヨ

文化2 (1805) 年、通称「天草崩れ」と呼ばれるキリシタン発覚事件が起きた。天草の大江、高浜、崎津、今富を中心に5,200人のキリシタンが発覚した。「天草崩れ」の際の取り調べに対する白状書が「今富村百姓共の内宗門心得違方日記」、「高浜村宗門心得違の者於村方調日記」、「富岡呼出宗門心得違の者共御吟味中日記高浜」、「大江村宗門心得違の者御吟味日記」として残されている(濱崎, 2003)。濱崎 (2003) から、Ave Maria (天使祝詞) のオラシヨを引用する(p. 148)。

さんまアまるやあまるやア。からさへんなア。こんまんでこう。ゑりむり。ゑりゑれ。すべゑんつう。つうべんつう。つうゑの。ゑんつう。さんだまるや。やあまあ。てるてるうらべす。のふべす。のふべら。とりゑにや。のミきり。ゑのつく。野山につち野二土あんめんじんす あんめんじんす。

(6) 安政3 (1856) 年の「浦上三番崩れ」文書にみられるオラシヨ

浦上村(現、長崎市)では、禁教時代に4度、キリシタンの発覚事件が起きている。寛政2 (1790) 年に「浦上一番崩れ」、天保10 (1839) (天保13 (1842) とする説もある) 年に「浦上二番崩れ」、安政3 (1856) 年に「浦上三番崩れ」、慶応3 (1867) 年に「浦上四番崩れ」が起きた。以下では、「浦上三番崩れ」の史料「肥前国浦上村百姓共異宗信仰いたし候一件御仕置奉候書付」より、オラシヨに関する記述を谷川ほか (1972) から引用する(p. 833)。

先祖共より持伝信仰いたし来候ハンタマルヤと申白焼仏像一体、イナツシヨウと申唐かね仏座像一体流金指輪様の品に彫付有之候ジゾウスと申仏一体日繰書物とも所持罷在、親共より口授受候ガラスサ・アベマルヤ・天ニマシマスと申経文相唱、

「本文ガラスサ外ニヶ條唱方相糺候処左の通申立候。

一、ガラスサミチミチタモーマルヤノ御身ニ御体ナシ奉り御アルジハ御免シニテトモニマシマ

シアンメンジユス。

一、アベマルヤガラチシャシーナドソデクダヲダチトレイツノニケシシハンタマリヤ。

一、天ニマシマス我等ガ御親皆モ尊ミ給ヒ身ハ来ラセ給ヒ地ニ於テハ日々御養ヒ是ニテ我等ガアタヘサシ下サレアンメンジユス。」

4. キリシタン語彙の復活

江戸幕府は嘉永7（1854）年に日米和親条約を、安政5（1858）年に日米修好通商条約を締結する。この結果、開港地での教会建設が認められ、文久元（1862）年に横浜、元治元（1864）年には長崎にカトリックの天主堂が建設された。こうして、長崎大浦天主堂における潜伏キリシタンとパリ外国宣教会のプチジャン Petitjean 司教との歴史的な再会が果たされることになる。維新後、明治新政府はキリスト教禁教政策を続けるつもりであった。しかし、欧米各国から強い抗議を受け、明治6（1873）年に切支丹禁制の高札を撤去した（片岡, 1957: 高木, 1978~80）。

（1）プチジャン Petitjean 司教の言語戦略

プチジャン Petitjean は、潜伏キリシタンを教会に呼び戻し、正式なカトリックの教化を行うために腐心し、中世末期から伝わるキリシタン語彙を用いた教理書の編纂・出版を思いつく。彼は潜伏キリシタンが所持する書物を収集し、そこに記されたキリシタン語彙を用いて教理書を作成した（松崎, 1928: ラウレス, 1940: 海老澤, 1943）。彼の書簡から、この言語戦略の意図を読み取ることができる。以下の引用は、彼が横浜教会のジラル Prudence-Seraphin-Barthélémy Girard 教区長に宛てて書いた慶応元（1865）年5月29日付の書簡の一部である。引用は純心女子短期大学長崎地方文化史研究所（1986）による（pp.113-114）。

ラテン語とポルトガル語の用語の問題に関してローカニユ師と私は、残念ながら親愛なるムニクウ師の意見は実行できないのではないかと、思っています。漢字は、文学とか日本人の学者のためには非常によいのです。私はその事については異議を申し立てません。けれども、それは信者たちの場合にあってはなりません。人の話によると、六千から八千人の信者がいるのに、特別に勉強した人は一人もありません。極く少数の人が簡単な「ヒラガナ」を読むことができます。彼らの使っている言葉を、彼らから取り上げてしまうことは、私たちが彼らのものと全く違った宗教の指導者のように思わせてしまうことです。

書簡中の「ムニクウ師」は横浜教会の神父で、中国四川省で出版された漢語の教理書を直訳して『聖教要理問答』を編纂した人物である。彼は横浜での教理書編纂にあたり、中世末期から伝えられたキリシタン語彙ではなく、漢語による翻訳語を用いるべきだと考えていた。しかしプチジャン Petitjean は、潜伏キリシタンが先祖伝来のキリシタン語彙を用いていることに気づき、彼らを教会へ呼び戻すには彼らが使っていることばを用いるべきだと考えたのである。この言語戦略に則って編纂・出版された教理書は「プチジャン版」と呼ばれる。以下はそのうちの1書『聖教日課』（1868年刊）からの引用である。明治文化研究会（1928）による（p.48）。

びるじんさんた 聖まりやは、さんがぶりゑるあるかんしよを以 御告ありければ、其御胎内において天主の御子ひりよは人と成給ふと言ふ事

「童身」、「聖」、「天主」には漢語にキリシタン語彙の語音をルビとして付記している。「さん」、「あるかんしよ」、「ひりよ」はキリシタン語彙をそのまま用いている。こうした彼の努力により九州西北部では多くの潜伏キリシタン・カクレキリシタンが教会に戻り、洗礼を受けることになった（松崎, 1928）。そして、彼らは、キリシタン語彙が数多く収められた教理書に基づいて、信仰生活を送ることになったのである。つまり、キリシタンの復活は、キリシタン語彙の復活でもあったわけである。

（2）教会に戻ることなく潜伏形態の信仰を続けた人々

多くの潜伏キリシタンが教会に戻る一方、教会に戻らず、潜伏形態の信仰を続けた人々がいた。彼らが潜伏形態の信仰を続けた理由は様々に考えられているが（片岡, 1967）、プチジャン Petitjean が、潜伏キリシタンが代々伝えてきたキリシタン語彙を含むキリスト教用語の矯正に努めたことも、その一因ではないかと考えられる。以下は元治2 - 慶応元（1865）年に書かれた彼の日記風の覚え書きである。引用は純心女子短期大学長崎地方文化史研究所（1986）による（p.76）。

最初から、私たちに大変信頼を示していたこの水方は、私たちの前で洗礼の式文を、ためらわずに誦えました。（中略）私たちは彼の式文は疑わしいと思いましたのでそれを訂正し、又、訂正された式文に忠実に従って、洗礼の務めを続行するように、それから、出来るだけ度々司祭館に私たちを訪ねて来るよう勧めました。

「正統なカトリックの教化を行う」ことを念頭に置けば、彼の行動は是とされるべきであろう。しかし、この行動は潜伏キリシタンを動揺させた。浦上の潜伏キリシタンの指導者であったドミニコ又一は「指導された洗礼式のラテン語を巧く発音できないこと」を理由として、水方（指導職）の辞職を願い出ている（浦川, 1915）。又一はプチジャン Petitjean を「先祖伝来の信仰の正統な指導者」と認めて辞職したのである。しかし、そのように認められない人々もいた。結局、当時の潜伏キリシタン・カクレキリシタンの半数弱は教会に戻らず、潜伏形態の信仰を継続することになった（田北, 1970）。このため、カクレキリシタンの人々の用いるキリシタン語彙は、禁教期と同様、原語の語音・意味から変容していくことになった。

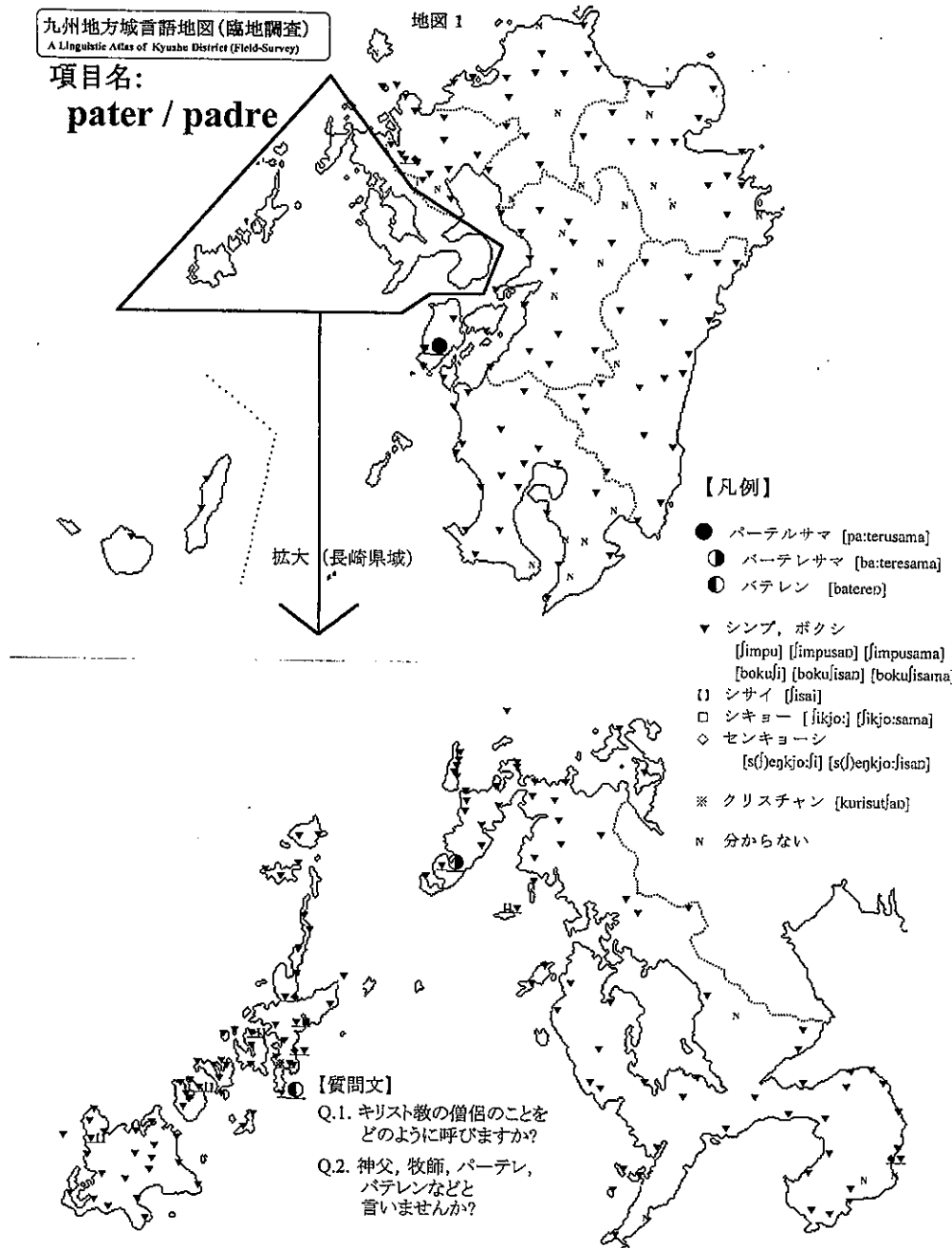
5. キリシタン語彙の現在

第2章から第4章では、ザビエルの来日から幕末維新復活期におけるキリシタン語彙の実態を記してきた。本章では、今日におけるキリシタン語彙の状況について記す。まず、地理的な広がりについて記述し、続いて、カクレキリシタンおよびカトリック信徒の人々がどのような語をどのように継承してきたかを、カクレキリシタン習俗研究書および筆者による現地調査の結果から考察する。最後に、キリシタン語彙を活用する新たな動きについて述べる。

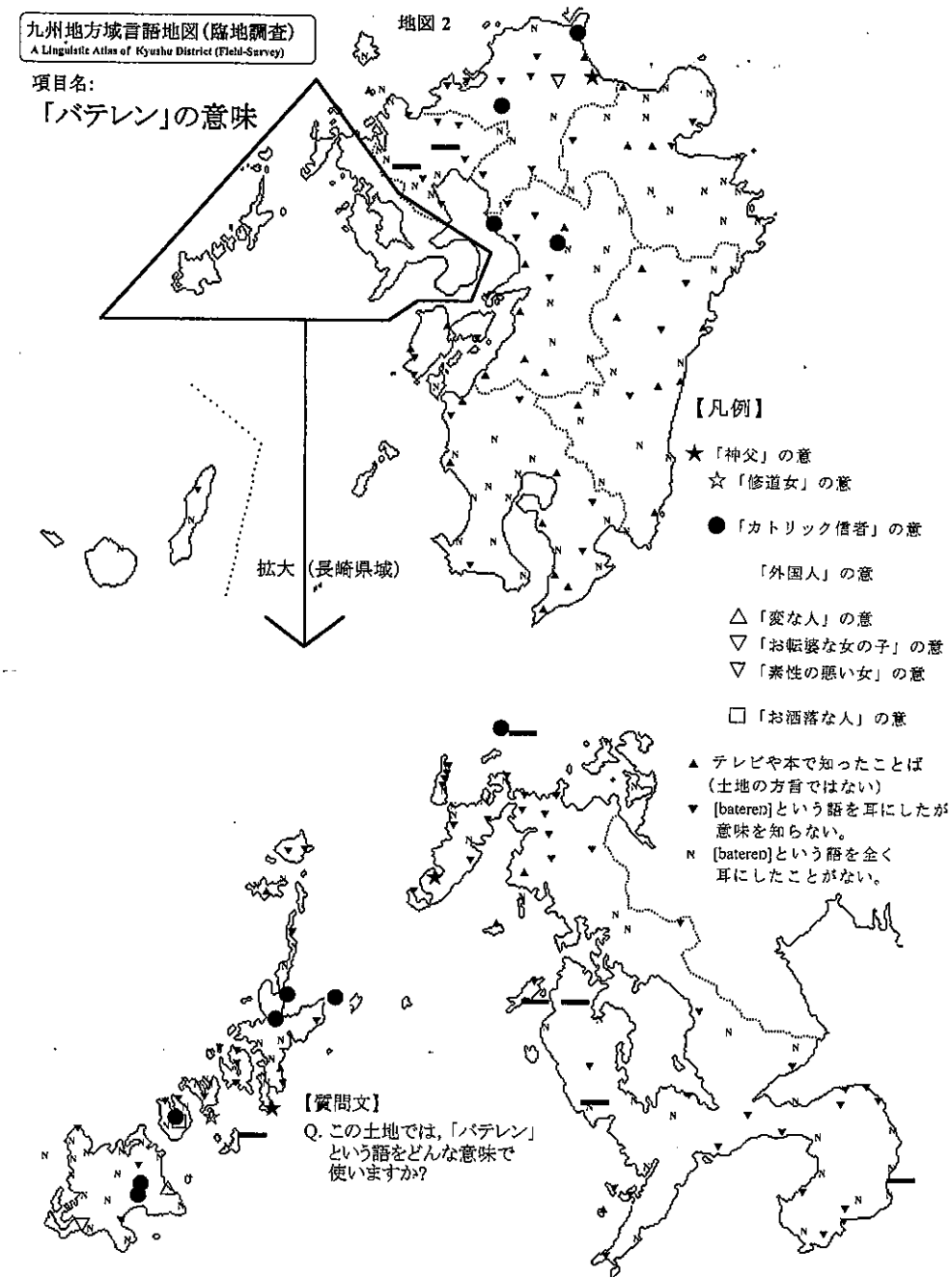
(1) キリシタン語彙の分布

2. (3) に掲げた「キリシタン版」所載のキリシタン語彙のうち、今日でも盛んに使用されているものは少ない。広く一般の人が用いているのは、キリシタン Christão とバテレン padre の2語くらいであろう。本稿では、小川 (2007b) に示された言語地図から、パーテル pater とバテレン padre の使用地域をみることにする。

地図1・2は、筆者が2003年8月から2005年11月にかけておこなった聞き取り調査の結果を示している。地図1を見ると、カトリック教会の神父のことを、天草で「パーテルサマ」、平戸で「パーテルサマ」、五島で「バテレン」と呼んでいることが分かる。地図2は「バテレン」の意味を尋ねた結



V-2-1 図 九州地方域言語地図①



V-2-2 図 九州地方域言語地図②

果を示したものであるが、長崎を中心に、福岡、佐賀、熊本で、「バテレン」を神父、修道女、カトリック信者、外国人、変な人、お転婆な女の子、素性の悪い女の意味で使っている人々がいる⁵。ポルトガル語 padre の土着化・風土化・方言化である。

ところで、1. (3) に記したとおり、これまで筆者は、一語ごとにキリシタン語彙を取り上げて考察してきた。その結果、「キリシタン語彙の継承」について、地理的な側面から、1つの傾向を帰納することができた。それは、キリシタン語彙が今日まで継承されている地域は、潜伏キリシタン、

⁵ 小川 (2007b) では、それぞれの地域でバテレンが様々な意味で使われるようになった経緯について詳しく考察した。ご参照いただければ幸いです。

カクレキリシタン、復活キリシタン（カトリック）が暮らす（暮らしてきた）地域と重なっているということである。それは当たり前ではないかと思われるかもしれない。しかし、キリシタン語彙の地理的な広がり（分布）を明らかにする研究は、これまで全くおこなわれてこなかったもので、ここで、以上の事実を確認しておきたい。彼らが、キリシタン信仰とともにキリシタン語彙を伝えてきたのである。

(2) カクレキリシタン

筆者は、カクレキリシタンの人々に対する聞き取り調査をおこなった経験に乏しい。そこで、カクレキリシタンの習俗を詳しく記述、考察している宮崎（1996）や長崎県教育委員会（1999）におけるキリシタン語彙を含む「オラシヨ」にかんする言及に基づいて考察する。以下は、宮崎（1996）からの引用である（p. 85）。

日本語のオラシヨはその意味を理解しようと努力すれば可能であるにもかかわらず、まったくその努力はなされていないといってよい。立て板に水のごとく、いかに早く流暢に暗唱することができるか、という点にのみ関心が払われている

ラテン語のオラシヨも伝承されているようだが、呪文化しており、その意味は忘却されている。例えば、長崎県平戸市根獅子町に伝承された Ave Maria のオラシヨは次のとおりである。引用は長崎県教育委員会（1999）による（p. 223）。瀧山正氏の昭和26（1951）年正月のノートに記されたものである。

アメモリア、ガーラスサーペンナノー、ベスベコ、ベレントツワ、イーモリエベス、ベレントヨツメ、ベンツルヒツツル、ジゾウサンタマリヤ様、サンジュウワンナビルコバテス、ノベス、スベツカラズ、ナンキンノーリヤ、モンタルノントル。アーメン十。

以下は、長崎県五島市玉之浦町布浦の岩村大吉氏のノートに記されたものである。引用は長崎県教育委員会（1999）による（p. 228）。

アベマリヤ、カシャベナ、ドメレコ、ベラツツヨ、イモノヤビツ、イキリンナ、ナレンツ、クロンツ、レンケゼツ、ゼゼツ御母三太丸ヤ、ピリコーマリヤ、デンデンタイカ、タクランナ、ゲンギヤトラゲ、ナンキリイモノツツリ、アンメン両須。

両者とも、元のラテン語文から大きく変容している。他方、次のような例もある。平成9（1997）年の調査で記録された、長崎市外海町西出津のカクレキリシタン組織の指導者役である中山力男氏のノートに記された Ave Maria のオラシヨは、次のとおりである。引用は長崎県教育委員会（1999）による（p. 250）。

アベマリヤ、グラチア、ベニスク、テクウム、ベネジクター、ツイン、ムリ、エリ、ブス、エツ、ベネジクツタス、フルクツウス、ベンシリス、ツイ、ゼズス、サンクタマリア、マテル、デイオラ、プロノビス、ベツカトリプス、ヌンク、エウ、イン、オラ、モルチス、ノスツレ。アメンデズス

ほとんど元のラテン語文の形態をとどめている。これは何を意味するか。中世期に伝えられた Ave Maria のオラシヨが今日まで正確に継承されたものか。否。先に挙げた根獅子町や布浦のオラシヨをみれば、黒崎の潜伏キリシタン・カクレキリシタンのみが、オラシヨを正確に継承できたとは考えにくい。これは、明治以降のどこかの段階で、当地のカクレキリシタン指導者の誰かが、カトリック教会の教理書・祈祷文を読み、参考にして、オラシヨを「整備」したと考えるのが妥当であろう。

筆者の僅かな聞き取り調査の結果に拠れば、今日のカクレキリシタンが「意味を理解した上で継承している」キリシタン語は、デウス、サンタマリア、パライズなど、僅かな語に限られるようである。しかし、それは「集団語として（方言として）共有されている」キリシタン語彙の場合である。個人によっては、中世近世受容期の「キリシタン版」、近世禁教期の潜伏キリシタンが伝えた諸テキスト、幕末維新復活期の「プチジャン版」などを翻刻した書物を買求め、勉強し、キリシタン語彙を学習・理解している可能性がある。上記の黒崎のオラシヨは、そのことを思わせる史料である。

(3) カトリック信徒

幕末維新復活期、「プチジャン版」によって復活したキリシタン語彙は、長崎・天草などのカトリック信徒の人々に、原語の語音・意味に基づいて使われるようになった。しかし、教理書におけるキリシタン語彙の使用については、「プチジャン版」の出版当時からカトリック教会においてもこれを問題視する人々がいた（純心女子短期大学長崎地方文化史研究所編、1986）。その後、キリシタン語彙によって書かれた「プチジャン版」には問題があるとの見方が広がり、信者から回収されたという。しかし、そのことによって、直ちにキリシタン語彙が失われたわけではなかった。長崎や天草では、今日でも多くのカトリック信徒が、5.（1）に掲げたパーテルサマ、バーテレサマの他、お祈りのことをオラシヨ、オラッシヨ、念珠のことをコンタス、コンタツ、コンタク、天国のことをパライズ、天主のことをデウス、イエスのことをイエズス、聖母マリアのことをサンタマリアと言っている。念珠について「教会ではロザリオというが、私は昔からの言いかたを守ってコンタツという。」と発言された方もいた（熊本県天草郡河浦町大字崎津、平成17（2005）年10月30日調査）。これは、教会の神父や指導者たちは新しい「ロザリオ」という言い方をしようと指導するが、自分は、先祖代々継承してきた「コンタツ」を使う、という強い意思表示であった。最後の「プチジャン版」と呼ばれる『切支丹の聖教』の出版は明治16（1883）年であるが、それを以てすぐにカトリック教会からキリシタン語彙が消えたわけではなかった。それは終戦後も信者の間で使用され続けていたのである。

他方、昭和以降も、ミサはラテン語でたてられており、そこでいくつかのキリシタン語彙が使用されていた。しかし、1962（昭和37）年から1965（昭和40）年にかけて、バチカンで「カトリック教会の現代化」をテーマに「第2バチカン公会議」が開催され、カトリック教会が執りおこなう典礼、ミサ、秘蹟、婚姻の挙式、聖務日課、教会音楽における現地語の使用が認められた結果、ミサはラテン語ではなく日本語でおこなわれるようになった（南山大学、1986）。このことも、長崎・天草のカトリック

ク信徒がキリシタン語彙を失いつつある一因となっているようである。

(4) キリシタン語彙の活用

今日、広く一般の人が用いているキリシタン語彙は、キリシタン *Christão* とバテレン *padre* の 2 語くらいである。しかし、芸術界や産業界において、キリシタン語彙を活用する例が増えてきている。芸術界では、いわゆる「南蛮趣味」の系譜に連なる数多くの作品が作られ、その中で多くのキリシタン語彙が使われている。最初期の南蛮趣味文学として、北原白秋の詩集『邪宗門』(明治42(1909)年)、木下杢太郎の戯曲「南蛮寺門前」(1909(明治42)年)、上田敏の自伝的小説『うづまき』(明治43(1910)年)などがあり、芥川龍之介には「おぎん」(大正11(1922)年)や「糸女覚え書」(大正13(1924)年)などの「キリシタンもの」と呼ばれる一連の小説群がある。戦後も、遠藤周作の『沈黙』(昭和41(1966)年)、片岡繁男の『聖ジュワンの水』(昭和63(1988)年)などが書かれてきた。なかにし礼の『長崎ぶらぶら節』(平成11(1999)年)は第122回直木賞を、変容したキリシタン語彙を含むカクレキリシタンのオラショが度々引用される青来有一の『聖水』(平成13(2001)年)は第124回の芥川賞を受賞した。近年でも、坂東眞砂子の『パライゾの寺』(平成19(2007)年)、飯嶋和一の『出星前夜』(平成20(2008)年)などが書かれ、後者は第35回大佛次郎賞を受賞している。明治末に始まる南蛮趣味文学の水脈は、途絶えることなく今日に至っており、キリシタン語彙が活用されている。

文学作品に次いでキリシタン語彙を多く取り上げてきた芸術は合唱である(詳しくは小川(2011)を参照)。その最も古い例は、柴田南雄の『宇宙について』(昭和54(1979)年)である。その後、大島ミチルの『男声合唱曲組曲「御誦」』(昭和59(1984)年)が発表され、千原英喜には『混声合唱のための「おらしょ」』(平成11(1999)年)、『混声合唱のための どちらなきりしたん』(平成15(2003)年)、『混声合唱のための きりしたん 天地始之事』(平成19(2007)年)などの作品がある。

産業界においてもキリシタン語彙の活用は盛んである。大分市で生産されているお菓子「ザビエル」は昭和37(1962)年に、長崎県雲仙市小浜町で生産されているお菓子「クルス」は昭和39(1964)年に、長崎県島原市で生産されている焼酎「バテレン」は昭和48(1973)年に開発・命名された商品である。いずれの商品の生産者・命名者ともキリスト教徒ではない。命名の動機は「当地にふさわしい、魅力的かつ印象的な名を付けたい」というものであった。また、宮崎県日向市には、その形状から「十文字の海」と呼ばれてきた観光地があった。近年この観光地は「クルスの海」と再命名され、観光PRがおこなわれている。

6. おわりに 一どのような語が、なぜ、どのように継承され、変容したのか—

本稿の目的は、長崎・天草におけるキリシタン語彙の継承と変容の実態を明らかにすることであった。第2章から第5章までの内容を整理してまとめとする。

キリシタン語彙は、天文18(1549)年のザビエル *Xavier* 来日後、翻訳主義から原語主義への転換にともない(2.(1))、受容されるようになった(2.(2))。宣教師の手によって活版印刷機が持ち込まれると、キリシタン語彙によって書かれた「キリシタン版」が作られ、信者に配られた(2.(2)、2.(3))。禁教時代、宣教師は不在であったが、キリシタン版の写本、口伝されたオラショや伝承を

とおしてキリシタン語彙は継承された。写本は文字通り、書き写して書かれ、受け継がれたのだが、その場合、かなり正確にキリシタン語彙が継承されたとみられる(3.(4))。他方、口伝されたオラショや伝承におけるキリシタン語彙は語音・意味ともに変容し(3.(5)、3.(6))、特に、仏教の影響を受けたようである(3.(2)、3.(4))。幕末維新期、長崎大浦天主堂の司教プチジャン *Petitjean* は、潜伏キリシタンが継承してきたキリシタン語彙を発見し、これを利用して教理書を作成し、司牧にあたった。こうして、キリシタンの復活と同時に、キリシタン語彙も復活した(4.(1)、5.(3))。カトリック教会とは距離を置いた潜伏キリシタン・カクレキリシタンのキリシタン語彙は変容を続け、今日に至っている(4.(2)、5.(2))。しかし、カクレキリシタンの中にも、カトリックの教理書などを読むなどして、キリシタン語彙を含むオラショを、原語に近いかたちで受け継いでいる人もいる(5.(2))。また、近年では、芸術界や産業界においてキリシタン語彙を活用する例が増えている(5.(4))。

(小川俊輔)

【引用文献】

- 姉崎正治(1925)『切支丹宗の迫害と潜伏』、同文館
 浦川和三郎(1915)『日本に於ける公教会の復活 前篇』、天主堂
 海老澤有道(1943)『切支丹典籍叢考』、拓文堂
 海老澤有道(1970)「排耶書の展開」『日本思想大系25 キリシタン書 排耶書』、593-606、岩波書店
 海老澤有道・チースリク、H.・土井忠生・大塚光信校注(1970)『日本思想大系25 キリシタン書 排耶書』岩波書店
 海老澤有道・井出勝美・岸野久編(1993)『<キリシタン文学双書> キリシタン研究第30輯 キリシタン教理書』、教文館
 小川俊輔(2006)「九州西北部地域における中世キリシタン語彙項目「死後の世界」についての地理言語学的研究」、『*Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache Studia Iaponica Wolfgango Viereck emerito oblata*』、152-168、Lincom Europa
 小川俊輔(2007a)「九州地方方言におけるキリシタン語彙 *Christão* の受容史についての地理言語学的研究」、『*広島大学大学院教育学研究科紀要*』55(2)、173-182
 小川俊輔(2007b)「九州地方方言におけるキリシタン語彙 *pater/padre* の受容史についての地理言語学的研究」、『*国文学攷*』192・193、15-25
 小川俊輔(2007c)「九州地方方言におけるキリシタン語彙 *Santa Maria* の受容史についての地理言語学的研究」、『*国語教育研究*』48、38-51
 小川俊輔(2011)「日本社会の変容とキリスト教用語」、『*社会言語科学*』13-2、4-19
 小川俊輔(2012a)「九州地方におけるキリシタン語彙の受容史」、『*日本キリシタン墓碑総覧*』、627-636、南島原市教育委員会
 小川俊輔(2012b)「九州地方における天国の受容史—宗教差、地域差、場面差—」、『*日本語の研究*』8(2)、1-14
 小川俊輔(2012c)「キリシタン語彙の歴史社会地理言語学—*oratio* オラショを例にして—」、『*外来語研究の新展開*』、78-96、おうふう

- 片岡弥吉 (1957) 「日本近代国家成立過程に於ける伊万里県 (深堀) 異宗徒移送事件」、『キリシタン研究』4、115-168
- 片岡弥吉 (1967) 『かくれキリシタン』、日本放送出版協会
- 片岡弥吉 (1970) 「収載書目解題 こんちりさんのりやく」『日本思想大系25 キリシタン書 排耶書』、627-630、岩波書店
- 片岡弥吉 (1972) 「天地始之事 解題」、『日本庶民生活史料集成18 民間宗教』、1001-1002、三一書房
- 紙谷威広 (1986) 『キリシタンの神話的世界』、東京堂出版
- 菊地秀明 (2003) 『太平天国にみる異文化受容』、山川出版社
- 岸野久 (1986) 「フランシスコ・ザビエルの「大日」採用・使用について」、『キリシタン研究』26、185-200
- 小島幸枝編 (1966) 『校本どちりなきりしたん』、福井国語学グループ
- 小島幸枝 (2009) 『コンテムツスムンダの研究 研究篇・資料篇』、武蔵野書院
- 五野井隆史 (1990) 『日本キリスト教史』、吉川弘文館
- 米井力也 (1998) 『キリシタンの文学』、平凡社
- 米井力也 (2009) 『キリシタンと翻訳』、平凡社
- 近藤政美編 (1977) 『こんてむつすむん地総索引』、笠間書院
- 純心女子短期大学長崎地方文化史研究所編 (1986) 『プチジャン司教書簡集』、純心女子短期大学
- 高木一雄 (1978~80) 『明治カトリック教会史 上・中・下』、キリシタン文化研究会
- 田北耕也 (1970) 「天地始之事」、『日本思想大系25 キリシタン書 排耶書』、631-634、岩波書店
- 谷川健一ほか編 (1972) 『日本庶民生活史料集成第18巻 民間宗教』、三一書房
- 谷川健一 (1982) 『わたしの「天地始之事」』、筑摩書房
- チースリク、H (1970) 「キリシタン書とその思想」『日本思想大系25 キリシタン書 排耶書』、551-592、岩波書店
- 天理図書館善本叢書叢書部編集委員会 (1976~1978) 『キリシタン版集』、八木書店
- 土井忠生 (1933) 「日本耶蘇会の用語に就いて」、『外来語研究』3、7-22
- 土井忠生訳註 (1955) 『日本大文典』、三省堂
- 豊島正之編 (1987) 『キリシタン版ぎやどべかどる 本文・索引』、清文堂出版
- 長崎県教育委員会 (1999) 『長崎県文化財調査報告書 第153集 長崎県のカクレキリシタン—長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書一』、長崎県教育委員会
- 南山大学監 (1986) 『第2バチカン公会議公文書全集』、サンパウロ
- 日本国語大辞典第2版編集委員会編 (2000~2002) 『日本国語大辞典 第2版』、小学館
- 橋本進吉 (1961) 『キリシタン教義の研究』、岩波書店
- 濱崎献作 (2003) 『天草の伝承キリシタンとオラシヨ』、サンタ・マリア館
- 林重雄編 (1981) 『ばうちずもの授けやう おらしよの翻譯 本文及び総索引』、笠間書院
- 松崎實 (1928) 「天主教の部解題」『明治文化全集第19巻 宗教篇』、5-20、日本評論社
- 宮崎賢太郎 (1996) 『カクレキリシタンの信仰世界』、東京大学出版会
- 宮崎賢太郎 (1998) 「日本人のキリスト教受容とその理解」『日本人はキリスト教をどのように受容したか』、169-212、国際日本文化研究センター
- 宮崎賢太郎 (2002) 『カクレキリシタン』、長崎新聞社
- 村上直次郎訳 (1968) 『イエズス会士日本通信 上』、雄松堂書店

- ラウレス、ヨハネ (1940) 「プチジャン司教とキリシタン伝統」、『カトリック研究』20 (2)、カトリック研究社 (純心女子短期大学長崎地方文化史研究所編 (1986) に再録、225-238)
- Ogawa, Shunsuke (2006) A Geolinguistic Study on the History of Acceptance of the Christian Vocabulary in the Northwestern Area of the Kyushu District of Japan. *Dialectologia et Geolinguistica*, 13, 108-123
- Ogawa, Shunsuke (2010 a) A Geolinguistic Study on the History of Reception of 'CONTAS' and 'ROSARIO' in the Kyushu District of Japan after the 16 th Century. *Dialectologia*, 4, 83-106
- Ogawa, Shunsuke (2010 b) On the decay, preservation and restoration of imported Portuguese Christian missionary vocabulary in the Kyushu district of Japan since the 16 th century. *Slavia Centralis*, III (1), 150-161
- 付記 本稿は平成20・21年度科学研究費補助金若手研究 (スタートアップ) (課題番号20820061) 「九州地方域方言における渡来語の受容史についての地理言語学的研究」(研究代表者:小川俊輔) および平成23~25年度科学研究費補助金若手研究 (B) (課題番号23720234) 「消滅の危機に瀕する「渡来語」の緊急調査」(研究代表者:小川俊輔) による成果の一部である。

明治初期にカトリックに復帰した集落に立つと、教会堂の圧倒的な存在感のみに眼を奪われがちであるが、日本におけるキリスト教の受容と展開のプロセスとして評価する場合、集落内での禁教期の営みこそ他にはない重要な価値を有している。外海地域や五島、黒島といった島嶼部では、この価値を適切に伝えるために、集落内の構成要素（不動産）だけでなく、信仰具をはじめとする有形の歴史資料や民俗文化財の整理・公開が有効と考えられ、今後の重要な課題である。

（中尾篤志）

長崎県内の多様な集落が形成する文化的景観
保存調査報告書

【論考編】

2013年

事務局 長崎県世界遺産登録推進室
〒850-0035
長崎県長崎市元船町14-10 橋本商会ビル7階

編集支援・印刷 株式会社 昭和堂
〒854-0036
長崎県諫早市長野町1007-2